

*答えは解答用紙に書きなさい。

次の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- 1 詩をロウドクしてほめられる。
- 2 あの先生はハクシキだ。
- 3 ココロヨい音楽が流れている。
- 4 人の信用をソコなう。
- 5 準備を整えて試験にノゾむ。
- 6 米、麦、あわ、豆、きびを合わせて五穀という。
- 7 水が額に飛び散った。
- 8 医者の不養生。
- 9 リーダーの指示に背いてはいけない。
- 10 南洋で発生した台風が日本を縦断する。

次の1・2・3の場面するとき、最もふさわしい表現を後から選び、記号で答えなさい。

- 1 職員室で国語の先生へノートを提出したとき
 - ア 桜木先生はいますか。
 - イ 桜木先生はいられますか。
 - ウ 桜木先生はいらっしゃいますか。
 - エ 桜木先生はいらっしゃられませんか。
- 2 保健の先生から食べ物好ききらいを質問されたとき
 - ア わたしはニンジンもピーマンも食べれます。
 - イ わたしはニンジンもピーマンも食べられません。
 - ウ わたしはニンジンもピーマンも召しあがれます。
 - エ わたしはニンジンもピーマンも召しあがる事ができます。
- 3 習い事のため、クラブ活動を途中で早退することを先生に申し出るとき
 - ア すみません、時間になりましたので失礼いたします。
 - イ すみません、約束の時間なので帰らせていただきます。
 - ウ すみません、そろそろ約束の時間になったのでお先にどうも。
 - エ すみません、時間になりましたのでお帰りさせていただきます。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部変更しています。)

ぼくは世界中のたいいていの猫が好きだけれど、この地上に生きているあらゆる種類の猫たちの中で、年老いた大きな雌猫がいちばん好きだ。

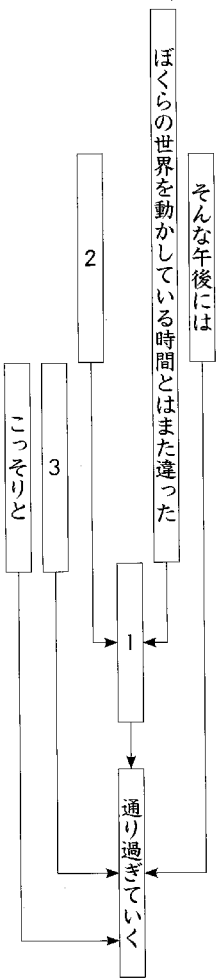
その猫が、長い間使われていなかった広い風呂場を思わせるような、とてもひっそりとした広がりのある午後、太陽の光のあふれた縁側で昼寝をしているとき、その隣にこもりと寝転ぶのが、好きだ。(中略)

② そんな午後には、ぼくらの世界を動かしている時間とはまた違った、もう一つの時間が、猫の体の中をこっそりと通り過ぎていく。子供であるぼくの小さな細い指は、猫の毛の中に、そのような時間の流れ方を感じることができる。猫の時間は、まるで大事な秘密を抱えた細い銀色の魚たちのように、あるいはまた時刻表には載っていない幽霊列車のように、猫の体の奥にある、猫の形をした温かな暗闇を人知れず抜けていく。(村上春樹『ふわふわ』)

問一 線部①「好きだ」の主語を本文中から書きぬきなさい。

問二 線部②「そんな午後には、……通り過ぎていく」の言葉のつながりを図式化したとき、1、3にあてはまる

語句を文中から書きぬきなさい。



四

次の各組の [] には、おたがいに対応になる漢字がひとつずつ入ります。その二文字を熟語にして答えなさい。

- 1 水が豊 [] にある。 [] 困に苦しむ人々。
- 2 [] 意に満ちた発言。 [] 親 [] 大使として難民保護の活動をする。
- 3 地震で自宅が被 [] にあう。 [] 駅から近くて便 [] だ。
- 4 失 [] を恐れずにやりぬく。 [] 吉野は桜で知られている景 [] 地だ。
- 5 クラスの出席者を点 [] する。 [] 水分の [] 収が早い。

五

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

ついに、みんなが太郎左衛門のうそのため、ひどいめにあわされるときがきた。それは、五月のすえのよく晴れた日曜日の午後のことであった。なにしろ場合がわるかった。みんなが——というのは、徳一君、加市君、兵太郎君、久助君の四人だが——たいくつでこまっていたときなのだ。麦畑は黄色になりかけ、遠くからかえるの音が、村の中まで流れていた。道は紙のように白く光を反射し、人はめつたに通らなかつた。みんなは、この世があまり平凡な(へんぺん)のにうんざりしていた。どうしてここには、小説のなかのように出来事がおこらないのだろう。久助君たちは、なにか冒険(ぼうけん)みたいなことがしたいのであった。あるいは、英雄(えいゆう)のような行為をして、人びとに強烈な感動をあたえたいのであった。そう思っているところへ、その道角(みちかど)から、太郎左衛門がひょっこりとすがたをあらわしたのである。そしてかれは、まっすぐみんなのところへくると、目をかがやかせていった。

「みんな知ってる？——こんど、大きなくじらが、新舞子(にんまこ)で見世物(みせもの)になっているとき。なんでも、十メートルほどもあるんだって」
 なにかできごとがあればいいと思っていたやさきだから、みんなは、太郎左衛門のことばだったけれど、すぐ信じてしまった。そしてまた、これは [A] うそでもなさそうだった。なぜなら、新舞子の海岸には、そのくじらがいないとしても、よく見世物がきていることは、夏、海水浴(かいすいよく)にいったものなら、だれでも知っている。① 見にいこうということに、一べんで話がきまった。新舞子(にんまこ)といえは、知多半島(ちたはんじま)のあちら側の海岸(かいがん)なので、峠(とうげ)をひとつ越(こ)していく道(みち)はかなり遠い。十二、三キロはあるだろう。しかし、みんなのからだの中には、力がうずうずしていた。道は、遠ければ遠いほどよかったのだ。

太郎左衛門も加えて一行は、すぐその場から出発した。家へそのことをいってこようなどと思うものは、ひとりもなかった。なにしろ、からだはつばめのようにかるかった。つばめのように飛んでいって、つばめのように飛んで帰れると思っていたのである。とんだり、かいたり、あるいは、「帰りがくたびれるぞ」などと、かしこそうにおたがいを制しあって、しばらくは、正常歩(せいじょうほ)で歩いたりして、進んでいった。野には、あざやかな緑の上に、白い野ばらの花がさいていた。そこを通ると、みつばちの羽音(はねね)がしていた。白っぽい松の芽(こぼれ)が、におうばかりそろいのびているのも、見ていった。半田池(はんだいけ)をすぎ、長い峠道(とうげみち)をのぼりつくしたところから、みんなは、沈黙(しんもく)がちになってきた。そして、もしだれかがしゃべっていると、それがうるさくて、はらだたしくなるのであった。知らないうちに、みんなのからだに、つかれがひそみこんだのだ。だんだん、みんなは、つかれのため頭(かぶ)のはたらきがにぶってきた。そして、あたりの光が弱(よわ)ったような気がした。じっさい、日もだいたいふん西(にし)にかたむいていたのだが、それでも、もうひきかえそうというものは、だれもなかった。② まるで命令(めいれい)をうけているもののように、先へ進んでいった。

そして大野(おおの)の町(まち)をすぎ、めざす新舞子(にんまこ)の海岸(かいがん)については、まさに、太陽(たいやう)が西の海(うみ)にぼっししようとして日(ひ)がぐれであった。五人はくたびれて、みにくくなって、海岸(かいがん)に足をなげ出した。そして、ぼんやり海(うみ)の方(かた)を見ていた。くじらはいなかった。また、太郎左衛門(たろうざゑもん)のうそだった！ しかしみんなは、もう、うそであろうがうそでなからうが、そんなことは問題(もんだい)ではなかった。たとい、くじらがそこにいたとしても、みんなはもう、見ようとしなかつたろう。つかれのために、にぶってしまったみんなの頭のなかに、ただひとつ、こ
 ういう思いがあった。

「とんだことになってしまった。これから、どうして帰るのか」

くたくたになって、一歩も動けなくなつて、はじめて、こう気づくのは、分別(ぶんべつ)がたりないやりかたである。じぶんたちが、まだ分別(ぶんべつ)のたりない子どもであることを、みんなはしみじみ感じた。とつぜん、「わッ」と、だれかなきだした。森医院(もりいん)の徳一君(とくいちくん)である。わんぱくものでけんかの強い徳一君(とくいちくん)が、まっさきになきだしたのだ。すると、そのまねをするように兵太郎君(へいたろうくん)が「わッ」と、同じ調子(ていし)でなきだした。久助君(きゅうすけくん)も、そのなき声を聞(き)いているときたくなってきたので、「うふうふん」と、へんななきだしかただったが、はじめた。つづいて加市君(かちくん)が、ひゅっといきをすいこんで、「ふえーん」とうまくなきだした。みんなは声をそろえてない。するとみんなは、じぶんたちのなき声(こゑ)の大きいのにびっくりして、じぶんたちはどりかえしのつかぬことをしてしまつたと、あらためて痛切(いたせき)に感じるのであった。そして、四人(よにん)はしばらく泣(な)いていたが、太郎左衛門(たろうざゑもん)は、ひろつた貝(かい)がらで、足(あし)もとの砂(すな)の上にすじをひいているばかりで、なきだきなのであった。ないていない人のそばでないているのは、ぐあいのわるいものである。久助君(きゅうすけくん)はなきながら、ちよいちよい太郎左衛門(たろうざゑもん)の方(かた)を見て、太郎左衛門(たろうざゑもん)もいっしょになければよいのに、思(おも)つた。④ こいつはなんというへんな、わけのわからんやつだろうと、

またいつもの感を深くしたのである。

日がまったくぼつして、世界は青くなつた。最初に、久助君のみだがきれたので、なきやんだ。すると、加市君、兵太郎君、徳一君という、なきだしとはぎやくの順で、せみがなきやむようになきやんでいった。そのとき、太郎左衛門がこういった。

「ほくの親せきが、大野にあるからね、そこへいこう。そして電車で送ってもらおう」

どんな小さな希望にでもすがりつきたいときだったので、みんなはすぐ立ちあがった。しかし、それをいったのが、ほかならぬ太郎左衛門であることを思うと、みんなはまた、力がぬけるのをおぼえたのである。もしこれが、だれかほかのものがいったのなら、どんなにみんなは勇気をふるいおこしたことだろう。やがて、大野の町にはいったとき、みんなは不安でたまらなくなつたので、

「ほんどけ、太郎左衛門？」

と、なんどもきいた。そのたびに太郎左衛門は、ほんどうだよ、とこたえるのであったが、いくらそんなこたえを得ても、みんなは信じてはできなかった。久助君も、太郎左衛門をよはや信じなかった。——こいつは、わけのわからぬやつなのだ、みんななどはもの考えかたがまるでちがう、別の人間なのだ、思いながら、みんなにたちまじっている太郎左衛門の横顔を、するどく見ていた。すると、太郎左衛門の顔は、そっくり、きつねのように見えるのであった。

町の中央あたりまでくると、太郎左衛門は、

「ううんど、ここだつたけな」

などとひとりごとしながら、あつちの細道をのぞいたり、こつちの路地にはいたりした。それを見ると、ほかの四人は、ますますたよりなきを感じはじめた。また、太郎左衛門のうそなのだ。いよいよ絶望なのだ。しかし、まもなく太郎左衛門は、ひとつの路地からかけだしてくると、

「見つかつたから、こいよ、こいよ」

と、みんなを招いたのである。みんなの顔に、暗くてよくは見えなくつても、さアつと生気の流れたのがわかつた。足が棒のようにつかれても忘れて、みんなはそつちへ走つた。いちばんあとからついていきながら、久助君は、だが待てよと、心の中でいった。あまり有頂天になると、幸福ににげられるという気がしたからであつた。なにしろ、あいては太郎左衛門なのだから、**B** ことはできないはずだ。そう考えると、またこんどうもそのように、久助君には思えるのであつた。そして久助君は、時計をならべた明るい小さい店のところにくるまで、太郎左衛門をうたがっていた。しかし、そこが、ほんどうに太郎左衛門の親せきの家だつた。太郎左衛門

からわけを聞いておどろいたおばさんが、

「まあ、あんたたちは……まあまあ！」

と、あきれてみんなを見わたしたとき、久助君は、救われたと、思った。すると、きゆうに足から力がぬけて、へたへたとしきいの上にすわつてしまつたのであつた。

(新美南吉『嘘』)

問一

空らん部

A

B

に入る語句として最もふさわしいものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A ア よもや

I イ なまじ

ウ ウ まさか

エ エ まんざら

オ オ もはや

B ア 理にかなう

イ イ 真にうける

ウ ウ 礼をつくす

エ エ 真にせまる

オ オ 信をおこす

問二

線部①「見にいこうということに、一ぺんで話がきまつた」とありますが、その理由を説明しなさい。

問三

線部②「まるで命令をうけているもののように」とありますが、ここでは、少年たちのどんな様子を表現しようとしていますか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア つかれてはいても、はじめに自分たちで立てた計画を達成しようと思つていよう

イ ここまで歩き続けてきたつかけのために、何も考えられなくなつてしまつていよう

ウ こんなにつかれる計画に賛成した、自分自身や周囲に対して腹立たしく思つていよう

エ 今まで歩き続けたつかけがたまり、そろそろ歩くのがいやになりはじめていよう

オ 本当はもう歩きたくないのだが、その姿を見せまいと自らをふるいたたせていよう

問四

線部③「太郎左衛門は、……なきださないのであつた」とありますが、この時の太郎左衛門についての説明としてあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア とんでもないことをしたとは思つていようが、みんながいないのは自分のせいでもあり、責任を感じていよう

イ みんながいない様子を見て、自分の力で何とかしなければならぬと思つていよう

ウ これから暗くなるのにどうすればよいのかわからず思案していよう

エ みんなが自分のうそにだまされて困つていよう様子を見て、さらにみんなを困らせようと思つていよう

オ みんながいずれなきやんでくれる時が来るのを、ひとり静かに待つていよう

「彼は目もよく見えないようだったし、歩き方もよたよたしていて、五十歳くらいかと思いました。ところが何と、まだ二十代だったんですよ」

殺害、餓死、病死などの恐怖と直面させられていたスタシヤックさんは、一体どのようにして生き延びたのだろうか。

「多くの人たちが連合軍が助けてくれるとか、神が救ってくれるとか、他の力に期待していました。でも私には、希望だけが大切でした。人間は鋼鉄のように強い神経をもっている。その神経にたえず希望という小川が流れているかぎり、人間は耐えられるのです」

むろん運もある。が、それだけではない。強い意志と人間への信頼感、それに友だちの助け、生き残れるという自信も必要だった。また、労働の現場が屋根の下だったか外だったかも生死を左右したと、生選した人たちは口々に語ってくれた。

戦後、腕に刻まれた青黒い囚人番号を抱えながら、スタシヤックさんは新たな希望と使命感に燃えて政治家になった。が、間もなく様々な圧力を受けて、学者の道を選んだ。

「私にとってかけがえのないものは、孫娘のカロリーナです。私が生還できたことの証明と、未来の希望が彼女にはあるからです」

八重桜のたもとを通った若者たちの後ろで、花卉が舞った。花に向けたレンズの焦点を合わせていると、^③ファインダーの中にはほえむカローリーナが見えたような気がした。

(注) *1 未曾有：いままで一度もなかったこと。

*2 冷戦：武力を用いず、国と国とが争うこと。

*3 アウシュビッツ絶滅強制収容所：ポーランド南部にあり、多数のユダヤ人を捕虜として収容した。

(大石芳野「希望」)

問一 スタシヤックさんはナチスドイツの手によって強制収容所に入れられましたが、戦後まで生き延びました。収容所に入れられてから戦争が終わるまでのスタシヤックさんの人生について、事実だけを簡潔に答えなさい。ただし、書き出しは解答らんにあるように「スタシヤックさんは」とすること。

問二 線部①「心の痛みに耐え切れなかったからです」とありますが、何に対する「心の痛み」だったのですか。文中から十二字で探し、書きぬきなさい。

問三 線部②「人間は……耐えられるのです」について、(I)と(II)の問いに答えなさい。

(I) 文章の終わりに「人間は耐えられるのです」とありますが、具体的にどのようなことに耐えたのですか。文中から十字以上、十五字以内で探し、書きぬきなさい。

(II) スタシヤックさんにとって「希望」とは、どのようなものですか。本文全体の内容をふまえて四十五字以内で説明しなさい。

問四 線部③「ファインダーの中に……見えたような気がした」とありますが、筆者はどのようなことを感じていたのでしょうか。三十字以内で説明しなさい。

問五 に入る文として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 金銭をもらうためではなかった
- イ ナチスを倒すためではなかった
- ウ 幸せにしようためではなかった
- エ 村を救ってもらうためではなかった

問六 次のうち本文の内容に合っているものには「○」、異なっているものには「×」と答えなさい。

- ア スタシヤックさんに落ち合うためにポーランドに入国した筆者は、ソ連当局の険しい視線を浴びた。
- イ 絶望とは人間が生きるためのエネルギーを失うことだと、筆者は考えている。
- ウ スタシヤックさんに初めて会ったとき、年齢よりも三十歳近く老けていると筆者は感じた。
- エ 強い意志と人間への信頼が悪運を変えられることができると、収容所から生選した人々に筆者は聞かされた。

